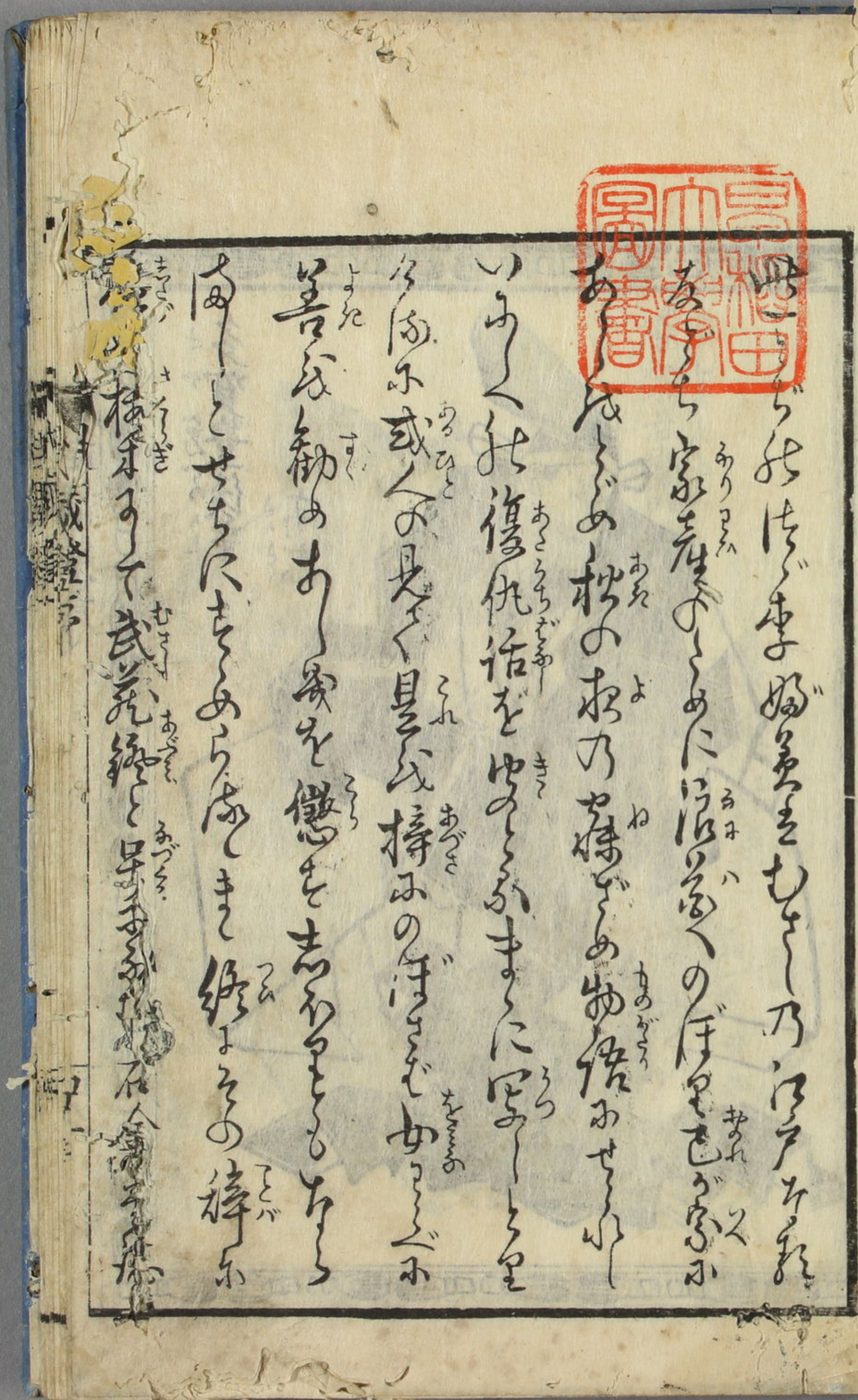
武藏のぶみ　巻一

へ13
3582
1

門へ13
號 3582
卷 1

# 東談小說 裡史戲作



多賀豐後守
高忠

堀宗右衛門
好道

壞縫 祐甫

堀宗三郎好孝

大磯の嫖妓
妻木

大野銀四郎純兼

# 復仇武藏鐙總目録


壹の巻　大磯の赤縄　姫心乃遺恨
二の巻　名器を獲　死道の闇害
三の巻　嫖妓乃義操　商客を嗜欲
四の巻　海上を再會　兵庫乃旅泊
五の巻　再度の身愛　會讐の復仇


總目録畢



# 復仇武藏鐙巻之壹

## 大磯乃赤縄

今を昔足利八代乃將軍義政公と申ます六代將軍義教公乃御二男ふく御母ハ裏松左大臣藤原重光公の女ゑ先將軍義勝公早世ふよりて義政公足利乃統をつぐく將軍宣下あり天下乃政務のいとなみハ風流乃道ふ意を慰め和歌を詠じ申樂を翫び就中茶道を好ミ玉ひ東山ふ山莊をきづき諸侯を招て茶の湯の儀式度く

なれむ緒侯の面々も我れ劣らじと茶道を嗜み唐物の名
器を買ひ求め愛翫せらるゝあまり都鄙の高客時を得て
唐山より持渡る茶盌茶器香炉香合乃類を買とり是
を緒侯に賣て利を得る事夥しかりと其頃将軍の
御舎弟政知公と鎌倉に違ひ関八州を管領せしめ給ふ
に近江國長賀乃領主長賀豊後守高忠を政知公乃補
佐として鎌倉に在勤せしめられ此高忠も其道の好
者にて家中乃士に堀宗右衛門と云て食禄百五十石を頂

戴する武士京師の茶人珠光乃門人にて茶道の規矩を
達し給ふ此宗右衛門を師範として茶事を学ばれ給ふ
一家中の士も宗右衛門に茶道の教を受る者多し其中
に大野喜馬太と云て普請方を勤る士あり世嗣乃男子に
なりなれば鎌倉の町人河邑荘兵衛と云て鎌倉管中の番匠
頭を勤る者の二男銀四郎と云る者を所縁に付て養子
とし給ふに西三年を経て喜馬太に病死し給ふ銀四郎名跡
を嗣て普請方の用人格となり給ふに程なく養母も死没

なる是ゆとして銀四郎忽ち独身となり後独なる侘ゆ堀宗
右衛門が門人となり數寄の道を学び我邸舎の小房ゆ炉
を切非番の日ハ釜をとりけく楽々ゆ元来此銀四郎ハ酒を
好く色ゆ耽る性あれば小人閑居して不善をなを理朋友
我招き点茶せ一後ハ酒肴を設て酒宴を催し果
ハ乱酔して大磯の花街へ赴むき昔樓ゆ登りく歌妓を
招き唱さめりく無益の財を費をるゆ少くも益ゆ充
扇屋の妻木とゝる據君あり抑巷中ゆ双なき美貌ゆ



て抑の腰婢婚ゆ花の顔艶麗なれば通ひくゝ嫖客ゆ
妻木が色香ゆひかれざるなし遂ゆ銀四郎も妻木ゆ美
貌ゆ惑を奪ゆ已ゆ国の花とせんとなれども妻木ハ大野ゆ
驕慢なる我嫌ひ酒の對手ゆハ出まとも一度も抗ゆ伽を
せざれハ銀四郎ハまもく心あくれ何年なびくせんあと種く
意を困めゆ遂ゆ或日非番ゆあるゝ例ゆ釜をとけ師匠
堀宗右衛門の子息宗三郎を私事ゆ招き茶をとゝめ
後又酒を敵久ゆ。雑談ゝく稍時を経しゝゆ銀四郎ハ

銀四郎

コレサ　ばさま　ホテめくを
ちきまれへせとろく　ふふそ　夜の
ろくとも　門が　主　ふくふさるハサ
あんふしろア　ア　ア　ふ　ニ　ニ　ぢい
のまきなくちやア
ハ　銀四郎　のつくぢ
ろくまるヨ

ばさま
又　銀さんのむすぢ
そうまつとおようど
あんとろとろ　ねを
ろのまきを

宗ろ

ちぶ
ちおく子めろとろちげんふ
もんとしとろろ　ハ方の
ふちまうろろふつもろと
ちまうちぶれく

仲居ちよ

ちみこんのむすも
そうしいとんじや
ちむうあたもだもう
どそそろうまれ

酒癖出て宗三郎を強て勧めひとゝふ郎舎を出て大磯の花扇屋にうるゝ花車出迎て是ハ何方風ゞ吹ーやらんまづ上へ通すとく樓上へ伴ひ銀四郎が熟人なれぼとて外葉と人歌妓と妻木を呼出して奥を添ーむ。銀四郎ハ宗三郎を誘ひ来て心下心を妻木を手ゞ入ゝめなれが只管妻木ゞ盃をすゝめ或ハ贅あるを怨て果ハ手を把ゞ膝ゞ寄て狼藉ゝだらなど宗三郎ハ方慎ゝふ元性なれども今宵銀四郎がむりゞ勧る仮ゞ嫌ゝ不得廓へ来るゞ大野ゞ酒ゞ酔て狼藉をる残らさゝ痛くおのゝ渠ゞ妻木ゞ強てさゝるる盃を肩ゝ代て見をのゝ或ハ妻木を怨ゝ罵をなぶめなどゝれど妻木ハ堀ゞ深切を悦び且その男ぶり乃大野とハ雲壌面白く肩秀又有まゝ死姫男子なる上起居物ゝ近賤ーうぶれだるる人と二世を契てゝ女ゞ生をー甲斐ハおれとおのゝ口管媚を含て宗三郎ゞ面をつんやりゝゝあゞ堀も数盃の酒ゞハ酔つ妻木ゞさゝらゞ落ん風情の情ゝうゝゞ結ものをゝゝ日知已のゝゝ銀四郎ハ此体をつゝて大

が妻を恐れども。流石あらぬ罵をうけつるも得せず。独酌
殘り甚だ怒氣に乗じて大盞をうけとり。波々と受て宗
三郎に実つけ。母よ宗三主是を助けとりふぞ。堀ハ大野が
眼ざし乃常なるぞ。対乃角々を妬心とかきぞ。例の
酒癖なるぞ〜と思ふれば辞て渠ぞ怒を引起さんも
不奥なるぞ〜と思ひ己叟を得ぞ勉々漸に飲盡し。銀
四郎が盃を戻し。酌が再び溢るゝ許に酒をたぐせて。此度
ハ妻未ふつゝはけ。やよ是を助てよとゝ妻未ハ酒を深



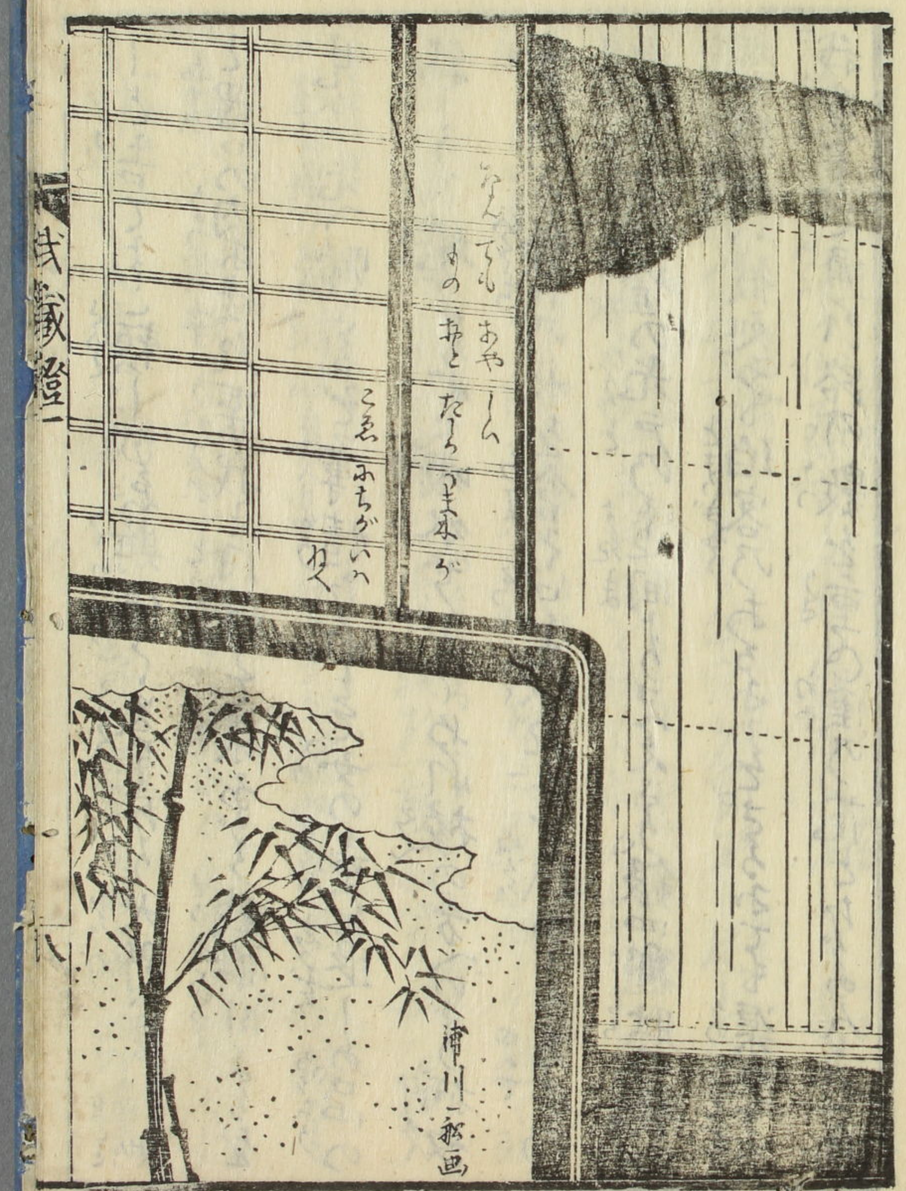
嗜されむ。左や右にのく辞ども。大野曽て肯ざれバ絵乃
なくて是を飲休ふもてなし。滴許の〜。余を水盤の中
へうたゝーてさ〜戻さ。銀四郎ハ猶嚙くと吟ゝ酒無理と云
く両人をもり潰さんとさるふぞ。座大ふのてあまた花車
と心を合せ大野を酔卧しめ為。互ふ飲ふをしてまぐ
〜銀四郎ふ盃を勧られむ。むろゝ上戸乃僻として乱言吐
ちしなぐ。又數盃を傾け果ハ泥乃ごく酔ぬ。我を忘て
席上ふ横さゝ卧ふ雷の如く鼾をしてぞ寝ぬ

宗三郎よく〻意を安んじ。其身も痛飲の酔ふ堪へて口中を嗽ぎと席を立られば。妻木ハ手燭を把く手水盤のある方へ伴ひ水を汲てあらく用意の解酒丸を服せあふと必抱し小時こなさあく酔を醒しもとて一室ふ誘ひ卧食を設て休め。肩背をさすりさすり多る。宗三郎ハ慎深き性なれども。十分酒ふハ酔つ。妻木が情ふ感ぜられて忽ち慎を忘れ。一言二言の戯言も。さる〻ぬ奇偶ふや。遂ふ妹背乃桟となりて。果ハ比翼乃札となり。爰ふ夢を結ぶ



嫉妬乃遺恨

斯く其夜も七ツの時を報ずる頃。銀四郎ハ以前乃楼上ふて酔卧ゐるが袷ゆと吹こむ風ふと眼をさめ。四辺をみれば盃盤もとり散らめ。宗三郎妻木ハ影も在られぬ偖ハ我思ひ過ぎ酔卧ゐ。宗三郎ハ何方へ往ん〻と。頻ふ手をあなたこなたふ時あらく女の童出来り。大野見ふ向ひ振氏ハ如何と問ふ。先ふ入りて養へ見ハ妻木がいひつけふふて。銀四郎主用をさるに尋ねハ宗三郎主を疾うせの


武蔵燈一
なんでもあやしんすのあとたろうまゝかゝこゝろ
ふちがいゝなく
浦川一秋画

武蔵燈一

しと告てよこ頼しける斯偽て答しなり。大野ハ是ヿ
と思ひの内ふ呟ひ渠我と同伴して来ながら我酔臥したるを
見捨先へ帰るぞ薄情なれとて女の童を退しめ帷中の
秘まりて堪がたれば。嗽水せんとてやれ椽の方へいさり。柄杓
をとりて銭口の水を含て口を嗽ぎ手を拭ながら左手乃
方をこんるふ燈の光戸の透間よりこえたり銀四郎肚乃裏ふ
想ひ褶倩ハ彼処ふも泊客乃あるふてぞ。さるふても渠妻木
我是まで通ひ路の数を重て閨乃花となかめんとされ

と今ふ従ハざるを恐ひなるか。彼房ふ泊まりしハ妻木が嫖
客ふハあらざるか其面をぶ見そしかなと。さし足して忍より
細目ふあけし戸乃透より片目を射て覗れハ豈はからん
皎しといひし宗三郎妻木と枕をなし面を合して熟く眠
てあり。銀四郎是を見るより。一度ハ驚き一度ハ怒りて。嫉乃劫火
小胸を焦し小時吐息して在たるが。憤怒ふ堪ゐ。踏込て
く両人とも刺殺さばやとおもへども。腰ふ刀を帯ざれバそれ
も叶ねば。いかがせんと身を悶しが。ものひ足ふ立のきて。旧の樓上

ホ立戻アエ。人を呼ミ頻ニ大ホをとらせ。腰ホ帯して再び彼所へゆけ往ムとせゴ。又肚の裏ホ刺り〳〵せり。否ミ今渠奴們を切害せそ我身も又死罪をまぬがれ。不如方便とめゞして宗三郎ホ自滅させ。今の癇憤を晴さんものと逸る心弦ホ鎮めざり氣なる体ホく花扇屋を立出ゴ夜深なホ已ゞ邸舍へぞ入りる。堀宗三郎ハ是を待ちと妻木ホ一夜乃契をこめ思ゞ熟睡せ〻ホ。明告る鷄の声ホ驚ぞ元同伐さ白し。是ハ不覚ホ長寝せ〻ホ。大野ハいらホせ〻中〻人と遽し〻起人とも元伐妻木ハ押とめさのミ驚元のひを女の童ホ心得ミ。大野乃向ゑく法身ハ先ハ帰のひ〻と云せ〻ゞれば彼人を疾ゞ〻ひ〻ひ〻今ホ時ハ休のひとりへど宗三郎頭をふり不ク我大野ホ誘れゞ渠を先へゞ〻せ〻も朋友の信を失ふ。渠人も大ホ酔ゞ〻ゞ〻ゞ同の覚ゞ〻ホ。あ〻ゞ呼起して俱ホゞ〻めと起出ク衣服を著整ゞ。旧の樓上へいりゞ。ホ銀四郎乃早帰ゞ跡なれゞ大ホ後悔ゞ。一人ゞ〻ゞ立出るを妻木ハ門辺まゞ送アゞ

まるの逢瀬を約し。もゝ悪くして後をとうも堀八郎
へゞ飯ゝ見より宗三郎八妻木ゞうつ巳香をとられ孫
ようゝぬこゞとゝ知なゞら。又母ゝ隠し去の少くゝ大儀遍
ひ契巳の度重るゝつけ階老のゝこひとなゝ。ゝふもして
妻木を購出し宿の妻ゝせゞゝとおりへども物ゞゝ又
宗右衛門ゝ云出さんゝもうもなく。増く部家住の力ゝ及ゞ
ねゞ人きれゞ心を悩しゝう。偖彼大野銀四郎八妻木と
堀ゞ花とせられ。心中焼ゞゞく妬ゝ怨ゞゝ為ゝなゝく。ゝゝ



ゝうさゝ思をゝゝゝ。何乎宗三郎ゞ越度を見出さんゝゝ
ゝゝゞ其使を得ざれゞ又思ゝ遊女八意乃稼りせゝゝき
者なり。我今一應花街へいゝ。金銭を時ちゝ欲を仏く
妻妻木ゞ心を蕩ゝ。我ゝなゞゞゝて堀ゝ鼻あらせんゝ。家財
大小衣服まゞも貨ゝ置く金銀ゝ綢へゝゝゞゝゝ花扇屋
へいゝ。妻木ゝ招寄んゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。妻木ゝ宗三郎ゝ階老乃
契ゝゝ後八銀四郎の銀乃字を変ゞゝゝゝ。暦鏡袋
の金具まゞゝ銀を用ゞゞゝゝゝゝゝゝゝゝ。病ゝゝゝ付

477/8
47



其席へ出されい大野はとそ〳〵遺恨をうさ。歌妓幇間ふ
堀と妻木ゞ妻を探ゞ問ふ浮名をうらやむハ花街のふしひ
彼両人ハ睦じゝるのハさふゞう漆と膠の如しゑんどゝ尾鰭を
そへゞ只ゝふ絡ふゞ銀四郎ハ空の度ふ妬ハ炎燃ふなり。此六
方使をめゞ〻し是非宗三郎ふ自滅させ此恐腸を冷さん
ものと執念深ゝ心ふ巧ゝ大磯より立帰ふつゝる堀ゞひま
窺ひゝるゞ薄情ゝ。

復仇武藏鐙巻之一畢

六号ノ五